

# 書評と紹介

## 野本寛一著『生きもの民俗誌』

辻 貴志

本書は、近畿大学名誉教授で民俗学者である野本寛一氏が日本人と生きものの関係を描いた民俗誌である。本書は、全体で七〇二頁にのぼる大著であり、「はじめに」と「おわりに」をのぞき、序章と終章をくわえた全七章から構成される。

序章「天城山麓のムラから」では、天城山麓のムラのワサビ栽培の事例をあつかい、実にさまざまな生きものを食物連鎖のアクターとして登場させ、ワサビ農家に苦楽をもたらすさまを描いている。そして、人が生きものの民俗を文化にとりいれ、生きものとのかけひきを豊かに展開することで、ムラでの生を充実させてきた人の歴史を証明し、生業と生きものの密接なかかわりについて本書の意図を明確にする。

第一章「獣―ケモノ」では、シカ、クマ、イノシシ、キツネ、モグラをとりあげ、それぞれの日本各地の民俗について、生態、食文化、自然暦、儀礼といった側面からの多様な民俗事例について個別に網羅する。シカの事例では、観光資源としてのほか、角の薬効をはじめさまざまな実用性がある反面、シカによる作物・森林食害が各地で深刻化しており、シカに寄生するヤマビルも拡散している。そのため、日本各地では、シカの追放・服従芸能や狩猟儀礼といった民俗が発達してきた。それぞれの記述に濃淡はあるが、いずれの獣も人との関係において実用性をともなう存在として描かれている。いっぽうで、害獣としてみなされている点にもふれており、獣と人が密接な利害関係にあることを強調している。

第二章「鳥―トリ」では、ツバメとツルの民俗事例をとりあげている。ツバメもツルも人にとって吉兆を意味する鳥であり、神と結びつき、人はこれらの鳥にやさしいまなざしを向けてつきあってきた。地域によってはツバメが玄關に巣を作るとその家は繁盛するとされ、赤飯を炊いたという民俗が記録されている。ただし、鳥害として多くの地域で問題視されている鳥のネガティブな側面についてはあつかっていない。

第三章「蛇―ヘビ」では、マムシ、ハブ、アオダイショウをとりあげる。マムシやハブは毒性の強さから忌避の対象となり、防除のためのさまざまな民俗儀礼が存在する。民間薬として利用されるマムシには、マムシ捕りを生業にのみこんだ生業民俗も存在していた。沖縄や奄美大島ではハブよけの呪術と技術が発達しているが、ハブをサトウキビを食害するノネズミを駆除する有益な生きものにとらえる地域もある。無毒のアオダイショウは家の主として大事にされるいっぽう、食用慣行はない。このように、ヘビの種類によって民俗がことなる点を事例をもとに示している。

第四章「魚・貝―サカナ・カイ」では、アマゴとタニシに焦点をあてている。アマゴは海の魚に縁遠い山に生きる人にとって最高のごちそうであることから、その漁撈暦が詳細に記載され、漁獲量の豊穡のために神饌として粟粒をもちいた鮓を作る民俗、毒流し漁にもふれられている。いっぽうのタニシは、農薬の使用によりしだいに水田から姿を消したが、人にとって身近なごちそうであり、貴重なタンパク源である。ひな祭りにタニシを食べる地域は全国的に

みられ、さらに雨乞い、火伏せ、眼病の呪物として民俗的に認識かつ利用されてきた事例にまで話がおよぶ。

第五章「昆虫ームシ」では、コオロギ、ケラ、ワタムシ（アブラムシの一種）、カメムシ、クスサン（ガの一種）といった昆虫が、野菜などの害虫のほか、雪や雨などを予測する自然暦になつてきていること、ブユヤカ、ノミやシラミは防除のための民俗的対処法がおこなわれてきたこと、ハチ、とくにスズメバチはハレの日のごちそうのほか、食用や薬用に利用されることをとりあつてきている。また、人にとつて害になる昆虫には、害虫駆除および昆虫の大発生の抑止目的で虫送りや虫供養がおこなわれてきた経緯があり、日本各地で昆虫の害が根深い点にもふれている。

終章「旅の終わりに」は、日本人の古くからの農耕様式である焼畑と生きものとの関係に話題を展開する。イチモンジセセリ（チョウの一種）やニホンミツバチは焼畑に植えられたソバの受粉に大きく貢献する存在とみなされたいっぽうで、スジムシ（ガの一種の幼虫）が大発生するとヒエに被害をあたえることのほか、オオカミが焼畑を荒らす動物の駆除の役目になつていた事例をはじめ、焼畑民の生きものとの利害関係に注目する。焼畑では、火入れにより多くの生きものの命を奪うことになつて、現代社会においても単に害虫だからといって生きものの命を簡単に奪う傾向を批判し、人の自然との距離の乖離が生きものに対する人のいづくしみを軽視することになつたことをふりかえり、かつ考え直す重要性を示唆し、本書をしめくくる。

以上、本書は、生きものと人との関係が過去からひきつづき、きわめて多重的かつ多彩であり、双方が厚い民俗をはぐくんできたことを長年におよぶフィールドワークによって収集した知見をもとに証拠立て記述した民俗誌である。これは「生きものが怖い」「気色が悪い」などと毛嫌いする風潮の到来に対して、

民俗学の力によって生きものと人との本来的な関係の近しさを世に問うことのみでもある。

本書は、生きものと人の意外な関係を象徴する民俗についてもふれている。たとえば、第一章のシカの角のスルメイカの擬似餌としての利用からは、山と海を生業にする人の交流についてしることができる。また、第二章のモグラの駆除が、農業のためだけではなく地震の鎮圧も想定している点や、第六章の虫供養を目的としたバツタ塚の存在は本書によつてはじめてしることができた民俗であり、評者にとつて新しい知の発見となつた。このように本書には古老の語り、自然暦、唄をはじめ、日本各地の生きものに関する多彩な民俗がちりばめられている。そのいっぽうで、著者がみとめているとおり、両生類や植物はほとんどふくまれていない。とはいえ、両生類や植物に関する民俗も本書には所々でおこまれていることから、本書は動物も植物も連鎖の関係にあることを意識して執筆されており、全体として自然の生きものを対象とした民俗誌であるといえる。

特筆すべきは、この大著の材料のほとんどが、著者独自のフィールドワークによりえられたものであり、著者の生きものに向けるまなざしが尋常ではなく、その知見が質的にも量的にも膨大かつ豊かな点にある。さらに、多くのデータは古い時代の古老への聞き取りから構成されており、これらの語りの束は今日ではもはや聞けないであろう民俗遺産としての価値を有する。また、語りには、古老の生年月日も付記されており、古い場合は明治時代に生まれた人の語りも確認できる。民俗学の特徴である消滅の危機に瀕する民俗を急ぎ記録するという課題をなしたげた労作でもある。著者が日本各地をくまなく歩き、詳細に民俗調査をおこなつてきた足取りが本書の端々からうかがうことができ、二、三頁にもおよぶ地名索引は圧巻である。

ここで本書を読む際の注意点を述べておく。まず、本書に多くちりばめられた貴重な民俗資料としての写真に撮影年代が付随されていない。おおよそ著者のフィールドワークの軌跡から類推可能ではあるが、写真資料の時代背景を確実にできない点は考慮しておく必要がある。また、第二章でツバメやツルといった人にとって好ましい鳥の民俗事象のみをとりあげており、人の生活や生業の害になりうる、たとえば、カラス、スズメ、トビにふれられていないことから、鳥の両義性が反映されていないと考えられる。第四章でもコイやタイ、アワビといった民俗学のトピックとしてよくとりあげられる生きものが登場しない点に不自然さを感じたが、ありふれた話題だけに著者があえて敬遠した可能性はある。いずれにしても、本書に登場する生きものをどのようにして選んで掲載したのか、その基準についてふれられておらず、非常に気になるところである。ただし、サル、オオカミ、ネズミ、カエル、サンショウウオ、サメ、サケ、カメ、植物といったそのほかの生きものについては、同著者の他の著書で論じられている(野本 二〇〇八)。

本書の「あとがき」で、著者は本書を「資料提供」として位置づけており、本書でとりあげられなかった生きものについて列挙している。すなわち、本書は未完であり、著者がこれまでに調査研究をおこなってきた生きものの民俗を可能なかぎり列挙したと評価されかねない面があるが、これだけの情報を実証的な民俗調査にもとづいて大著としてまとめあげる情熱には頭が下がる思いである。本書に掲載できなかった生きものについては著者のひきつづいての課題であろうが、同じく生きもの(スイギュウ、ウツボ、フナクイムシ、アメフラシ、ホシムシ)について人類学的に調査研究をおこなう評者にとって、資料としても調査マニュアルとしても重要な位置づけにあり深く刺激を受けた。

本書は学術的にきわめて価値が高く、民俗学の分野での消滅しつつある民俗

事象の早急な聞き取りと成果発信において大いに成功している。また、人と生きものの関係をあつかう人類学、生物学、生態学の分野とも本書は結びつきが深く、民俗学以外の分野における調査研究の参考や助けとなるだろう。奈良公園のシカと外国人観光客、くまモンやテディベアなどゆるい民俗情報についてもふれられているが、本書のボリュームと内容はけっして一般向けではない。しかし、急速に進む近代化やグローバルゼーションにとりこまれた日本人の生きものとの関係の希薄化を憂慮し、生きものに関する民俗のはぐくむ情緒や思考がひかえめな人間性の涵養につながる可能性を示唆しており、国内外問わずより多くの人の目にとまることを期待したい。とりわけ、著者は若い人に現代社会がかかえる生き方の問題と方向性の見直しを問いかけていると評者は感じとったが、その点についても本書で確認していただければ、日本民俗学の生きものに対するまなざしと民俗学そのものへの理解が促進されるであろう。

#### 引用文献

野本寛一 二〇〇八『生態と民俗—人と動植物の相渉譜』講談社  
 (京都、昭和堂、二〇一九年、七〇二頁、六五〇〇円十税、ISBN978-4-8122-1823-5)